

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：34604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593543

研究課題名(和文) 初老期認知症者とその家族を支援する専門職を対象としたサポート・モデルの構築と検証

研究課題名(英文) Formulation and validation of a support model for specialists providing support to people with presenile dementia and their families

研究代表者

家根 明子 (YANE, Akiko)

奈良学園大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：70413193

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：地域包括支援センター及び居宅介護支援事業所勤務の専門職を対象に実施した初老期認知症者(以下、当事者)への支援実態調査から、専門職は、当事者への支援経験の蓄積・連携体制の構築等を望んでいることが明らかになった。このためサポート・モデルとして認知症カフェ(以下、カフェ)を用い、専門職への支援を検討した。この結果、専門職は、カフェを通して「対等な生活者」という専門職の支援姿勢が育まれる、多職種と連携しながら支援経験を蓄積でき、自己効力感の向上につながる、当事者の強みの発見とQOLの向上に有用、と認識していた。専門職の課題解決にカフェがサポート・モデルとして有用であることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：A survey of support for sufferers of presenile dementia (hereafter referred to as the patients) was conducted among specialists working for Community Comprehensive Support Centers and Home Care Support Offices. Results show that specialists needed accumulated experience in supporting the patients and establishing cooperative systems. In response to this, a “Dementia Caffé” was employed as a support model through which support for specialists was examined. Specialists became cognizant that through the “Caffé” support attitude of specialists as being on an equal level with the patients was nurtured; experience in provision of support could be accumulated in cooperation with professionals of many disciplines, which led to improvements in the sense of self-efficacy; and patients’ hitherto strengths were exerted, which was beneficial for enhancing their Quality of Life. Use of the “Caffé” as a support model for solving issues of specialists was found to be effective.

研究分野：公衆衛生看護

キーワード：初老期認知症 地域包括支援センター 認知症カフェ 専門職

1. 研究開始当初の背景

本研究は、これまで研究代表者が取り組んできた若年認知症研究の一環をなし、関係機関の協力を得て、専門職を対象としたサポート・モデルの構築とその検証の実践から新たな看護介入の方法を見出すことを目指した。

(1)十分に明らかにされていない若年性認知症者の実態：わが国では一ノ瀬ら(1997)による調査以降、2006年～2008年に朝田らが「若年性認知症の実態と対応の基盤整備に関する研究」を実施している。この結果、全国における若年認知症推定患者数は3万7,800人と算出された。一方、認知症専門外来を受診して認知症と診断された者の4人に1人は65歳未満という谷向(2007)の報告もある。これらに加え、発症していながらも医療機関を受診していない潜在的な者も含めるとその数はさらに増加し、益々支援の重要性が高まる分野である。

(2)多様な分野の連携や協働による初老期認知症者への充実した方策の有用性：若年認知症の中でも40歳～65歳未満に発症する初老期認知症は、社会的役割の大きな年代にあることから、経済・就労・介護・制度利用をはじめ様々な課題を抱え、社会に与える影響も大きい(小阪,2009)。このため、医療保健福祉をはじめとしたフォーマル・インフォーマルの多様な分野による連携や協働の体制が必要である(厚生労働省,2011)。

(3)専門職が切望する支援と含むサポート・モデル構築の有用性：本研究で取り上げる専門職においては、初老期認知症者への支援は十分とは言い難く、立ち遅れている現状がある。例えば、初老期認知症者の介護保険サービスの利用に際して、介護支援専門員による支援が行われているが、抱える課題の多さ故に当事者のニーズを満たしているとは言い難い。

また、地域包括支援センターにおいても、初老期認知症に関する実態把握や相談業務、ネットワークづくりに取り組んでいるが、十分な成果は得られていない(厚生労働省,2011)。この

背景の一つに、支援の困難さに伴う自己効力感の低下がある(大沼2011)。さらに、研究代表者らが2011年度に行った「地域包括支援センター職員および居宅介護支援専門員へのアンケート結果」においても、専門職は、自身が提供する支援への不全感から、研修受講による質の向上と専門職への支援体制の構築をはじめ何らかの方策を希望している実態が示されていた。

2. 研究の目的

本研究は、初老期認知症ケアの質の向上にむけて、地域で暮らす初老期認知症者を支える専門職の実態と課題を明らかにし、専門職の自己効力感を高めるサポート・モデルの構築とその検証を行うことを目的とする。

注)専門職：本研究では地域包括支援センター職員及び居宅介護支援事業所介護支援専門員をさす。

3. 研究の方法

本研究は、専門職の自己効力感を高める支援に焦点をあて、次の方法を用いて初老期認知症ケアの質の向上に向けたサポート・モデルの構築とその検証を行う。

- (1)初老期認知症者への支援実態と課題を明らかにするために既に代表者が収集した専門職への量的調査に加え、質的調査を実施する。
- (2)専門職への量および質的調査結果を分析し、サポート・モデルを作成する。
- (3)初老期認知症者支援の場(認知症カフェ、家族会など)での当事者・家族・専門職とのかかわりを通して、作成したサポート・モデルに検討を加え、専門職による初老期認知症者支援の方策を示す。

4. 研究成果

(1)専門職の実態と課題

(居宅看護支援事業所勤務の介護支援専門員)
A 自治体下の事業所 600 箇所のうち無作為抽出した 200 箇所に調査用紙を郵送。回答が得られた 70 箇所のうち、「初老期認知症者の相談や対応・今後の支援に関する実態と意思」への記載があった 63 箇所を分析した。結果、事業所の

約半数は初老期認知症者を支援した経験を有さず、支援した経験を有する事業所においても、その人数は1~2名と少ないことが明らかになった。専門員は、初老期認知症者支援には既存のサービスだけでは対処できないことを痛感し、初老期認知症に関する学習を継続する必要性とその人らしさを見出す関わりや地域単位でのネットワーク構築の必要性を感じていた。以上のことから、専門員は多くの事例による援助経験の蓄積・研修・協力し合える連携体制の構築、多様な課題を相談できるスーパーバイザーを求めていることが明らかになった。

(2) 専門職の実態と課題 (地域包括支援センター勤務者)

地域包括支援センターに勤務する専門職が捉える初老期認知症者支援の課題を明らかにするために、A自治体下の地域包括支援センター100か所に調査用紙を郵送。回答があったセンター43か所のうち、自由記述に記載があった21か所を対象として、質的帰納的に分析した。

結果、センターに勤務する専門職は、初老期認知症者への支援経験が少なかった。支援経験がある専門職の思いの特徴は、方策への関わりと研鑽による支援の展望であった。支援者として、初老期認知症者への方策の乏しさ、初老期認知症者へ人々のネガティブなイメージの強さ、方策の乏しさと初老期認知症者にまつわるネガティブなイメージから生み出される専門職の自己効力感の低さが課題として明らかになった。

(3) 専門職の実態と課題 (地域包括支援センター勤務の看護職)

初老期認知症者への支援経験を有する看護職にインタビューを実施し、経験事例から初老期認知症者を地域で支えるための課題を明らかにした。センター看護職が経験した支援事例は、センターに辿り着くまでに医療機関・行政などいくつかの機関を経ていた。地域のフォロー体制が未成熟故に当事者や家族が周囲に状況を発信できない苦しさがあることを認識していた。この方策として、当事者や家族がスムーズに相談窓口としてのセンターを活用できるように、

地域に出向いての相談会開催を望んでいることが明らかになった。

以上、(1)~(3)を踏まえ、初老期認知症者を地域で専門職が支援するための方策として、アウトリーチ機能を有する相談の場をサポート・モデルとした。アウトリーチ機能を有する相談の場は、従来の家族会で行われている思いの共有や情報交換に加え、専門職による相談機能も併せ持つことが望ましいと考えた。本人・家族が暮らす地域に出向くという形態により、その地域住民が持つ初老期認知症者へのイメージの転換や当事者・家族による抱え込み・孤立の防止にもつながると考えた。同時に、専門職の望む、支援スキルの修得と具体的方策を体験できる場として機能することが期待できた。

(4) サポート・モデルとしての認知症カフェでの実践と振り返り

サポート・モデル(アウトリーチ機能を有する相談の場)として、認知症支援に携わる医師の呼びかけのもと認知症カフェを開催し、専門職とともにその運営に携わった。評価は、カフェでの参加者の観察とミーティングでの専門職の発言内容を資料として検討した。この結果、カフェは、認知症初期から適切なケアや支援に結び付く、気軽に立ち寄れる場、認知症への理解を深める機会をもたらず場、当事者の新たな一面を発見する場(初老期認知症者への認識がポジティブに転換)、ケアに向かう力を生み出す場、と専門職は意義付け、カフェでの事例から具体的な支援を学び、経験から得た初老期認知症者への接し方の知識を蓄積する場にもなっていた。そして、当事者・家族・地域住民もカフェでの関わりを通してその有用性を感じていることが明らかになった。初老期認知症者への支援において、当事者と専門職は対等な関係性の中でその場を楽しみ共有する「対等な生活者」という意識を徹底することが専門職の支援姿勢として望ましいことが示唆された。今後、一様ではない当事者の状態に応じた配慮と対応できるスキルの検討が課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

- (1) 家根明子: 認知症カフェにおける初期認知症者支援の実践, 奈良女子大学人間文化研究科年報, 査読無, 第30号, 2015, pp. 133-143
<http://hdl.handle.net/10935/3973>
- (2) 家根明子・小野塚元子・廣川聖子・高橋晶: スウェーデンにおける高齢者支援の実践, 奈良学園大学紀要, 査読無, 第二集, 2015, pp. 119-125
- (3) 家根明子: 地域包括支援センターによる初老期認知症者支援の課題 - 専門職の捉え方の分析から -, 奈良女子大学人間文化研究科年報, 査読無, 第29号, 2014, pp. 191-199
<http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/bitstream/10935/3724/1/AN10065983V29pp191-199.pdf>

[学会発表](計 12 件)

- (1) 家根明子: 認知症カフェにスタッフとして参加した専門職の学びと課題, 日本老年看護学会, 2015年6月13日, 横浜市
- (2) 小野塚元子: スウェーデンにおける認知症ケアの実践 看護職・福祉職へのインタビューと同行訪問を通して, 日本認知症ケア学会, 2015年5月23日, 北海道
- (3) 家根明子: Second report on support for patients with early-stage dementia: the significance of and issues associated with dementia cafés for these patients and their family members, ADI国際アルツハイマー病学会, 2015年4月17日, オーストラリア
- (4) 小野塚元子: Support for patients with early-stage dementia: First report on dementia café activities, ADI国際アルツハイマー病学会, 2015年4月17日, オーストラリア

(5) 家根明子: 認知症カフェにおける初期認知症者と家族に対する支援のあり方 - ミーティングにおける専門職の語りからの分析, 日本老年看護学会第19回学術集会, 2014年6月28日, 愛知県

(6) 家根明子: 若年認知症者と家族を対象としたつどいにサポーターとして参加する医療福祉職の思い, 第72回日本公衆衛生学会, 2013年10月24日, 三重県

(7) 小野塚元子: A市における初期認知症カフェの取り組み, 第16回日本老年行動科学会, 2013年9月1日, 愛媛県

(8) 家根明子: 初老期認知症者を地域で支えるための方策の検討 地域包括支援センターに勤務する看護職が支援した事例を通して, 日本老年看護学会第18回学術集会, 2013年6月5日, 大阪市

(9) 家根明子: 初老期認知症者との関わりにおいてA自治体下の地域包括支援センター専門職が望む支援, 第71回日本公衆衛生学会, 2012年10月26日, 山口県

(10) 家根明子: 地域包括支援センターの専門職が捉える初老期認知症者支援の課題, 第43回日本看護学会(老年看護), 2012年9月27日, 広島県

(11) 家根明子: 初老期認知症者とその家族を支援する介護支援専門員が捉えた課題 自由記述部分に書かれた思いの分析を通して, 第17回日本老年看護学会学術集会, 2012年7月14日, 石川県

6. 研究組織

(1) 研究代表者

家根 明子 (YANE Akiko)
奈良学園大学・保健医療学部・准教授
研究者番号: 70413193

(2) 研究分担者

西田 厚子 (NISHIDA Atsuko)
京都橘大学・看護学部・教授
研究者番号: 10324568

小野塚 元子 (ONOZUKA Motoko)
京都橘大学・看護学部・講師

研究者番号：30449508

北村 隆子 (KITAMURA Takako)
敦賀市立看護大学・看護学部・教授
研究者番号：10182841

藤原 奈緒(FUJIWARA Nao)
京都橘大学・看護学部・助教
研究者番号：50610515

南 朗子 (MINAMI Akiko)
京都橘大学・看護学部・助手
研究者番号：20637392

深山 つかさ (MIYAMA Tsukasa)
京都橘大学・看護学部・助教
研究者番号：70582865

鈴木 久義(SUZUKI Hisayoshi)
京都橘大学・看護学部・助手
研究者番号：10638167